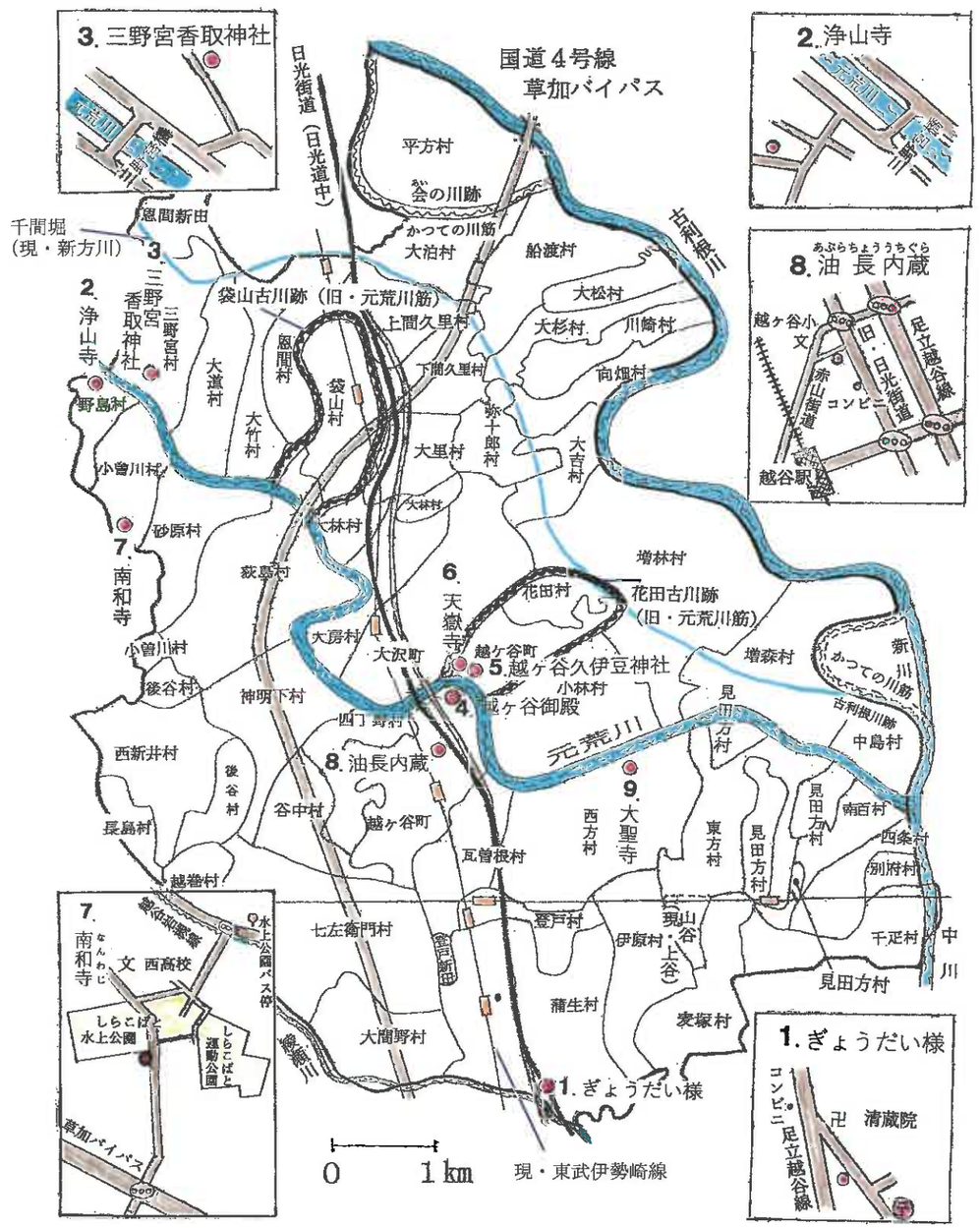
「ホームタウン・越谷のシビックプライド」の地図

～江戸時代にあった二町四十九ヶ村（越谷市）をベースに～



作図：加藤幸一

（この冊子の出版につきましては「越谷市しらこばと基金」のご助成をいただきました）
発　　行：2018年2
編集・発行：NPO法人越谷市郷土研究会　〒343-0818 越谷市越ヶ谷本町5-23 都築様方、靴屋・蔵　TEL048-962-2651
印　　刷：有限会社かつらぎ印刷

ホームタウン・越谷のシビックプライド

越谷には、市民としてのシビックプライド（市民の誇り）が、いっぱい！

越谷のスフィンクス・ぎょうだいさま

越谷のぎょうだいさまは…

越谷市の蒲生を通る日光街道にある茶屋通りに、「ぎょうだいさま」という不思議な石像があります。いまは、覆いに囲まれ、頭の一部しか見えませんので、余計分かりにくいのですが、鳥か、カエルか、あるいは修行をしながら旅を続けている「行者さま」なのか～「ぎょうだいさま」とは何なのか～地元の方は「鷲」だといっておられますが～何を表現しているのかが分からない石像です。全国的にも、こんな石像はないと思われます。

像の下には「砂利道供養」という文字と年代とが彫られているので、宝暦７年（1757）にぬかるみ道に砂利を敷いた記念碑であることは、はっきりしていて、いまでも「道中安全」を祈って、わらじが奉納されたりしています。不思議な像です。

写真　和田尚之

エジプトのスフィンクスは…

エジプトのピラミッドのそばにあるスフィンクスは、世界の七不思議に数えられる「顔はヒト、身体はライオン」の像で、「朝は４本足、昼は２本足、夜は３本足の動物は何か」という問いをヒトに投げかけ、答えられないヒトを食べてしまう（答えは「人間」）という神獣ですが、この蒲生の「ぎょうだいさま」も、そんな不思議なロマンの感じられる像です。

いまのこども達にとっては、まさに「怪獣」そのものなのでしょうか。それを260年も前に作りだした、越谷のヒトの想像力に乾杯！　そして、こんな不思議なロマン漂う石像のある越谷にも乾杯！

埼玉で最古の仏像が越谷に～

写真　上下ともに　林宏一氏
（越谷市教育委員会提供）

9世紀の仏像が見つかった！

これまで、埼玉県で最も古い仏像とされてきたのは、10世紀のものと言われる毛呂山町の桂木寺の伝・釈迦如来像と飯能市の常楽院の軍荼利明王像でした。

それを凌ぐ最古の折り紙が付けられる仏像が、越谷で見つかりました。それが野島・浄山寺の地蔵菩薩像です。

９世紀のものと認められ、埼玉県で一番古い仏像が越谷にあることとなりました。もちろん、千年以上前から越谷にあったのですが、いまでも毎年２月、８月の24日にご開帳されるだけの秘仏なので、文化財の専門家の鑑定を受けてなかったのです。3.11の地震の際に、厨子ごと倒れお地蔵様の足が折れました。その修理のために専門家に来てもらって、「９世紀」というお墨付きをいただきました。

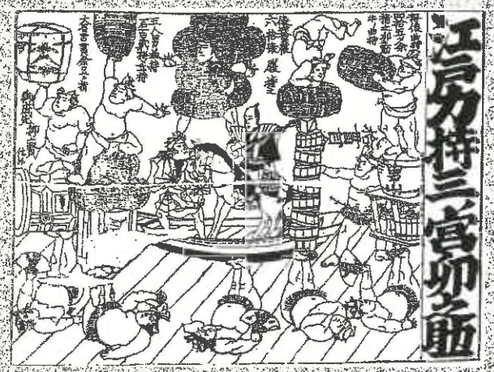
なぜ、越谷に！

９世紀というと、平安時代の初めです。越谷の平安時代には大道遺跡がありますが、浄山寺は大道の元荒川の対岸にあたります。大道のヒトたちは、お地蔵さまの最初の信者だったのでしょうか。

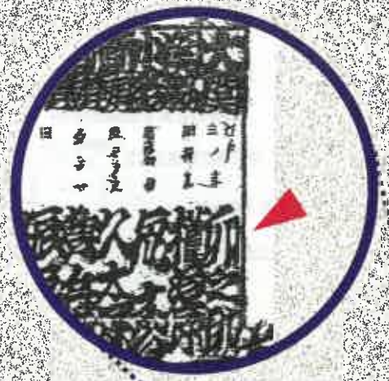
お地蔵さまの信仰と関係の深い天台宗の三代目の座主の慈覚大師・円仁が、栃木県の出身で、故郷への行き帰りに、この辺りを通ったかもしれないのが、貴重なお地蔵さまが、ここにあることにつながるのかもしれません。

何もないと思われてきた越谷に、県内最古の仏像があったのです！そしてお顔も美しい、越谷の誇りです。

越谷にいた日本一の力持ち



三ノ宮卯之助の生家から発見された無名印札（チラシ）
高崎力氏が卯之助の研究を始めるきっかけとなった。
中央で馬と二人の乗った山駕を両足で持ち上げているのが卯之助



力持番付　嘉永元年（1848）のもの
山梨県立図書館蔵

三野宮から日本一のタイトルホルダー

江戸時代の越谷には、日本一の力持ちがいました。越谷市三野宮出身の三ノ宮卯之助です。娯楽の少なかった当時に、人々の娯楽として喜ばれたのが、チカラ比べです。大きな、重い石を持ち上げることで競われました。

小さいころは、ひよわだった卯之助は、自分で身体を鍛え、働いていた瓦曽根の河岸（川の港）でも、荷物の上げ下ろしでチカラを磨いて、あちこちの力自慢大会で優勝して、グループを組んで見世物興行をすることとしました。

そのころは、力持ちが持ち上げた石には、その名が刻まれます。あちこちの神社などに、いまも卯之助の名が入った石（力石）が残されています。

あちこちに残る卯之助の力石

越谷市内には生まれ故郷の三ノ宮香取神社や、越谷の久伊豆神社にあります。

そして、卯之助グループの巡業したところ、例えば、浅草・台力稲荷神社、川崎大師、江島神社・奥津宮、鎌倉・鶴岡八幡宮の前、甲府市の稲積神社、長野県下諏訪町の諏訪大社・秋宮、大阪天満・天神さま、兵庫県姫路・魚吹八幡神社などにあり、魚吹八幡神社には、卯之助の大きな石像が立てられています。

日本で最重量の力石は、卯之助の持ち上げた、桶川市の稲荷神社にあるもので610㌔の重量です。お膝元の越谷の三ノ宮香取神社のものは520㌔でした。（残念！）

当時は、力持ちの番付があって、卯之助は東の大関に選ばれています。そのころは、横綱という地位がなかったので、東の大関が最高位でした。「日本一」のタイトルホルダーが越谷にいたのです。

（姫路市の魚吹（うすき）八幡神社にある三ノ宮卯之助の石像・下には卯之助の持ち上げた力石）

越谷を愛してくれた家康

御殿町の越谷御殿跡・碑（越谷市教育委員会提供）

徳川家康の襖絵・大聖寺蔵（越谷市教育委員会提供）

何回も来てくれた家康

徳川家康は、豊臣秀吉から武蔵国を所領としてもらって、幕府を開く以前から、越谷に来ていました。鷹狩りに来ていたのです。鷹狩りとは鷹を使って鶴や鴨などを捕まえる狩猟です。泊まるのは大きなお寺などでした。相模町の大聖寺は、そのお礼に襖絵をいただき、寺宝（越谷市文化財）とされています。

江戸に幕府を開いてからも、何回も越谷に来て、宿泊施設である「越谷御殿」を建てました。御殿は初め、増林にあったようですが、その後、いまの御殿町に移りました。御殿町の名は、そのゆかりです。

家康は、ほかに50ほどあった御殿の中でも、越谷御殿を好んでくれたようで、何回も来てくれていました。

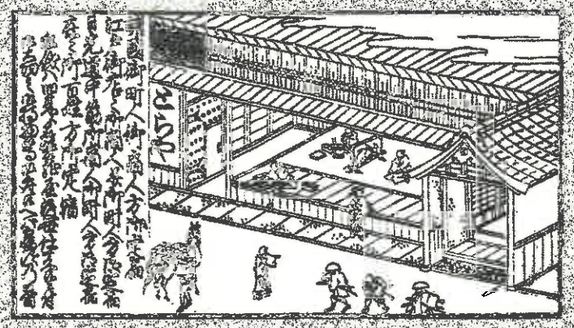
越谷御殿は移築された

その後、秀忠、家光の時代にも、御殿は使われましたが、4代将軍・家綱の時に、江戸を見舞った振袖火事（明暦の大火＝1657）は将軍の居城・江戸城のほとんどを焼き、将軍が住むところもなくなったため、越谷御殿をすっかり移築し、二の丸としてしまいました。

このため、越谷御殿を見ることはできなくなりましたが、家康が鷹狩りによく来て、越谷を知っていてくれたので、日光街道を造ったときに越谷を通るようにしてくれたり、越谷宿を置いてくれたと思われます。それが越谷の基礎となりました。越谷と家康とのご縁はいまも強く残っています。

絹本着色徳川家康画像・ときがわ町慈光寺蔵（ときがわ町教育委員会提供）

日光街道と越谷宿



日光街道・大沢「とらや」のあたり

日光街道・越谷宿「中屋」のあたり

諸国道中商人鑑　竹野半兵衛・菫井円水撰　祐屋久二郎刊　文政10（1828）　国立国会図書館蔵

越谷は日光街道から、越谷宿から…

「マチ」には、城下町、門前町～などがありますが、越谷は宿場町の分類に入ります。日光街道の宿場、旅籠がその基礎となっています。

家康の時代に、何もないところに、一本の線が引かれ、家も建っていない四丁野村に宿場や旅籠が建てられて、越谷が誕生したのです。

江戸・日本橋から数えて三番目の宿場（草加宿はその後にできたので、当初は二番目）です。～日光街道がいつ完成したかは不明。17世紀初めのことです～

江戸から6里9町の距離です。当時のヒトたちは一日10里を歩いたそうですから、半日ほどの行程のところが、越谷でした。

日光街道を通ったヒトたち…

この日光街道は、その後、日光を訪問した帰路の日光例幣使一行、参勤交代の東北の大名たち、日光詣での朝鮮通信使や琉球慶賀使、蝦夷地測量に江戸を立った伊能忠敬、日光参詣や伊勢参宮に行く庶民など、いろいろのヒトが通って賑わい、いろいろな文化が入ってきて、越谷の文化水準も高められ、越谷は発展していったのです。

越谷宿は大沢橋（太橋）から北の大沢宿と南の越谷宿との合宿（あいじゅく）から始まりました。そして、最初に越谷に置かれた本陣は大沢に移りました。旅籠は大沢が多く、越谷は商店のまちとして発展しました。

この越谷宿と大沢宿が、越谷の出発点であり、私たち、越谷市民の郷愁を誘う原点なのです。

初めての方言辞典をつくった越谷吾山

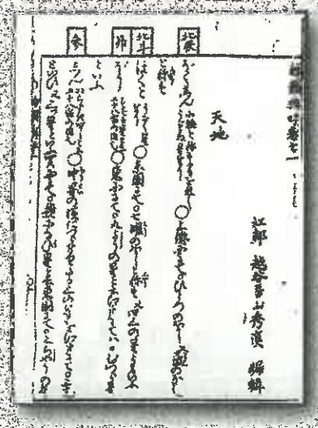
俳人・吾山（ござん）

江戸時代に、越谷出身の越谷吾山（こしがや　ござん）というヒトがいました。本職は俳句を作る「俳人」でした。江戸へ出て、「南総里見八犬伝」という長編小説などで有名な滝沢馬琴の俳句の先生でもありました。

（越谷吾山は享保２年（1717）から天明７年（1788）のヒトです）

そのころは、地方から江戸へ出てきたヒトも多くなって、お互いに言葉がわからないという不便も起こってきたことに、文字や言葉を扱う仕事柄、興味をもって、各地の人々の言葉を集めた「方言辞典」である「物類称呼」（ぶつるいしょうこ）を日本で初めて編集したのです。これが、日本における方言学の始まりと言われています。

越谷吾山



物類称呼・本文冒頭

方言学は吾山から

いまでも、大学での『方言学』の最初の講義は「越谷吾山」のことから始まります。

たまたま、ドイツでもこのころ、童話で有名なグリム兄弟によって、ドイツ方言学が始まったようです。

この吾山の俳句の句碑は、越谷久伊豆神社の池畔に「出る日の　旅のころもや　はつかすみ」があり、お隣の天嶽寺には「ひとつるへ　水のひかるや　けさの秋」の句碑と、吾山のお墓があります。

ベトナム仏教寺院が越谷に～

南和寺・本尊・釈迦如来

写真：松原知康

日本におられる在留外国人で４番目に多いのがベトナム人です。その方々のために建てられた、日本で初めてのベトナム寺院が越谷にあります。

しらこばと水上公園の南西側にある「南和寺（なんわじ）」です。

ベトナムの仏教は、他の南アジアの諸国が上座部仏教であるのに対し、日本と同じ大乗仏教です。

ご本尊は釈迦如来ですが、像の彩色はやはり異国情緒たっぷりで、光背の部分に電球が装置されていて、ピカピカ光ります。

ご住職のタ・トーン・ターンさんと尼僧のトン・ディインさんとトン・ティさんがおられます。

ベトナムと日本両国の友好・親睦が深まるにつれて、お寺も大きくなり、繁栄することでしょう。

こんなシビックプライドも～

千疋屋さん

千疋屋さんのマーク

東京の高級果物店・千疋屋（せんびきや）さんの発祥が、越谷であることをご存じでしたか。

越谷市の東南部にあった地名「千疋」に由来しているのです。いまの越谷市東町（あずまちょう）です。

ここの出身の大島弁蔵が江戸時代後期に、越谷の名産だった「桃」を舟運で江戸へ運んで「水くわし（菓子）安売り処」という看板で売り出したのが「千疋屋」さん。いまも新入社員研修で「発祥は越谷」と教えていただいているのは、うれしいことですね。

平田篤胤の夫人・おりせさん

平田篤胤

「明治維新と平田国学」
展示図録から
国立歴史民俗博物館刊　2004.9

江戸時代、「国学の四大人（しうし）」とよばれる四人の著名な国学者がいました。

本居宣長（もとおりのりなが）、荷田春満（かだのあずままろ）、賀茂真淵（かものまぶち）、と平田篤胤（ひらたあつたね＝安永５年（1776）～天保14年（1843））です。

篤胤の奥さんが子供を残して亡くなり、困っているときに篤胤の弟子であった越谷の豪商・山崎長右衛門（屋号を「油長」という油屋さん）が紹介したのが、越谷のお豆腐屋さんの娘の「お里勢（りせ）」さん。

お里勢さんは夫の学問のマネジメント、子供の養育などをこなし、秋田へ追放された篤胤に一生連れ添いました。この山崎さんの蔵が中央住宅さんが越谷市に寄付してくれた「油長内蔵（あぶらちょうぐら）」です。

全国最初の国民健康保険組合

越谷に昭和23年建てられた
林譲治・厚生大臣筆の記念碑
（越谷市教育委員会提供）

越ヶ谷町の国民健康保険は、昭和11年11月に、全国において第１号の「国民健康保険類似組合」として発足しました。そのあと、昭和13年７月に国民健康保険法が制定公布されたのです。世界恐慌の影響で町への納税もできなくなった隣人をみかね、町の有志は「至誠会」をつくり、資金をお互いに融通したりしていましたが、貧苦の主原因である病人の医療費救助に乗り出し、地元医師団の諒解をえて、「順正会」と名付けて救療活動を行うこととしたです。そして、「国民健康保険類似組合」となり、国民健康保険組合の認可申請を行いましたが、医師団との折り合いがつかず、「国民健康保険指定組合」としては、全国第２号の「組合」となりました。しかし、隣人愛から始まった越谷の制度は、いまも、私たち越谷市民の誇りとなっています。